

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34414

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13049

研究課題名（和文）近世前期における 勸化 勸化本作家の活動に注目して

研究課題名（英文）Early Modern Period "KANGE" in Japan; Focus on the Activities of Kange-books Writers

研究代表者

木村 迪子 (KIMURA, Michiko)

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：40836475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来、研究が手薄であった近世前期における勸化本の動向を、作家の活動に焦点を当てて個々に論じることで、当該時期における勸化本の全体像を解明した。勸化本の趨勢を担ったのが、羊歩・知空・空誓・了信ら浄土真宗本願寺派であることを示した。西本願寺は元禄期までに相伝と決別する。その過程で、本来であれば口伝により受け継がれるべきであった説法が勸化本として上梓されるようになった。また、羊歩の前身は浄土宗僧であり、その著述に浄土宗宗学の影響を強く見いだせることを、同じく浄土宗僧侶の真海が著した『浄土勸化標目章』との内容重複から示した。出版はまた、本来独自性のあった各宗派の宗学をハイブリッド化させたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における調査結果から、近世前期における個々の仏書作家等の具体的な活動が明らかになった。仏書作家等の活動は、一次史料の乏しい近世前期の上方出版そのものの有用な事例でもあり、これら出版成果が享保以降本格化する近世出版の礎になったことを明示するものであり、学際的研究における意義を有する。更に、本研究の対象となる仏書は、それ自身が近世文学研究の俎上にのることの乏しい分野であったが、研究成果からは、近世仏書とその作者・版元の活動が、近世文学と密接に関わっており、そこからは、例えば 倩女離魂 の新たな典拠といった、新見地も開けることが判明したのは、研究成果の含有する学術的意義といえよう。

研究成果の概要（英文）：By focusing on the activities of writers, the overall picture of the trend of "Kange-bon 勸化本" which books promoting Pure Land Buddhism, during the early modern period, which had previously been under-researched, was elucidated. It was shown that the Jodo Shinshu Honganji school, represented by writers such as Yobu 羊歩, Chiku 知空, Kusei 空誓, and Ryoshin 了信, drove the trend of kange-bon during this period. By the Genroku period, the Nishi Honganji school had abolished the tradition of oral transmission of sermons, which led to the publication of sermons as Kange-bon. It was also demonstrated that Yobu's predecessor was a Jodo sect monk, and his writings strongly reflected the influence of Jodo sect theology, as evidenced by the content overlap with "Jodo Kange Hyomokusho 浄土勸化標目章" written by the Jodo sect monk Shinkai 真海. The publication of Kange-bon also hybridized the unique theologies of each sect that had previously existed.

研究分野：近世文学

キーワード：近世仏書 勸化本 宗学 近世出版

1. 研究開始当初の背景

辻善之助(1877-1955)が近世仏教を「墮落仏教」と評して以来、近世仏教は他の時代に比べて低い評価に甘んじなければならなかった。しかし、近年、近世仏教の再評価が思想史学を中心に進められている。文学の領域においても、2016年度仏教文学会例会で「近世における縁起・僧伝の集成と展開」と題したシンポジウムが開かれるなど、近世仏教への関心の高さが指摘できる。特に、思想史学・民俗学・書物学と関連付けての考察は、西田耕三・堤邦彦・万波寿子らによって大きな進展を見せているといえるだろう。

一方で、近世仏書を総括的に検討し、文学研究への応用性を主張するような論考や、前述の諸氏の論考を受けて文学的な解釈に結び付ける研究についてはまだまだ少ない。近世における書物文化はあまりにも広域に亘っており、各研究者の関心が多方面に向けられざるをえないためとも言えるだろうが、出版文化が開花した近世期にあって、もっとも出版されてきたのは仏書である。更には、近世全体において、仏教はあらゆる事象の根底に位置する存在だった。幕府は儒学を奨励したが、仏教への帰依はそれとはまったく別問題だった。浄土宗において徳川の菩提寺として増上寺が権勢をふるい、真言宗において護国寺が幕府の庇護を得たのは、仏教が軽視できない存在であった証左である。近世仏教を内容的に理解することは、近世文学内のあらゆる分野における研究の深化に有用であり、近世文学研究全体の進展のために必要不可欠であるから、この総括的な研究は非常に重要なのである。

2. 研究の目的

上記問題の解決に向けて、研究代表者は近世期に成立した通俗仏書いわゆる「勸化本」に注目した。勸化本研究の先駆者・後小路薫(1946-2006)は「勸化本」について次のように定義している。

“高座で語られる説教を中心としつつ、より広く一般庶民へ仏教の教化を目的としている書籍”(後小路薫「近世勸化本刊行略年表」、同『勸化本の研究』〔和泉書院、2010〕収録)

上記の定義を基に氏がリストアップした勸化本の総数は、前掲年表の増訂版に至っては優に千を超えている。その数からみても、勸化本が研究素材の宝庫であることは疑いない。事実、勸化本の持つ文学的重要性は、例えば近世前期の仮名草子作家・浅井了意(?-1691)の著作への活用という面からも実証されている。和田恭幸は了意の仮名草子『堪忍記』(1659刊)と彼の仏書との記述の重複から、『堪忍記』の新しい読みを提言された(「『堪忍記』の性格」、『近世文藝』55号、日本近世文学会、1992)。和田の試みは近世文学研究に対する仏書の内容利用の有用性・発展性を示したものである。

このように、近世仏書の中でも特に文学的であり、総量も豊富な勸化本というジャンルに対する取り組みは近世仏教の総括的研究のための対象として、更には近世文学全体にとっても有意義なものと思ふべきだ。そして、後小路のリストに基づくと、勸化本のもっとも早い例は17世紀初頭に遡ることができる。以後、続々と勸化本の出版が続いた。ただし、多くの勸化本が出版されていたにもかかわらず、伝記が明らかな作者はごくわずかである。前掲の浅井了意、真宗仏光寺派の玄貞、浄土宗の必夢や浄慧、真言律僧の蓮体、真宗大谷派の諦住など、その全体量から比べると特性解明には不十分と言えよう。そこで、申請者は勸化本作家たちとはいったい何者なのか、という問いを本研究の起点に据えて検討を試みる。

すなわち、本研究は「勸化本作家とは何者か?」との問いを端緒として、近世前期(17~18世紀前半)における勸化本作家らの実態解明を目的とするものである。彼らの活動の基盤はどこにあったのか。京都のような都市部なのか、それとも地方なのか。出版を担った書肆との関係はどうなっていたのか。そして、勸化本作家たちは学僧なのか否か。申請者は博士論文で浅井了意を取り上げた。了意は仮名草子作家である一方、真宗大谷派の僧侶として多くの勸化本を執筆していた。彼について、学僧ではなかったが、そのために真宗聖教利用が制限されていたのではないのか、との見方がある。では、意のままに聖教を用いた勸化本作家たちは学僧であった、と言えるのか。こうした問いの解明が、特に未解明部分の多い近世前期における勸化の世界の全貌明示につながるのだ。

3. 研究の方法

本研究では、特に近世前期(17~18世紀前半)にかけて出版された、書名に「勸化」を冠する通俗仏書について、本文の収集を行い、更に内容に関するデータの集積から、一定の条件下におけるデータ抽出をすることで、近世前期における勸化本作家の持つ性格・著述の背景を解明した。

当初の予定では、大正大学附属図書館をはじめとする所蔵機関に足を運び、書誌調査を行った上で、データ収集を進めることを考えていた。しかし、2020年度からのほぼ3年間を、新型コロナウイルス流行により、研究方法の変更を余儀なくされた。幸い、多くの研究機関において、画像のインターネット上での公開が積極的に行われていた時期であった。必要な仏書の多くは、オンライン上で閲覧することが叶ったので、これをもとに、データ収集を行った。また、それ以外の仏書についても、比較的安価で売買がされている上に、流通量も多かったことから、入手は難しくなかった。

具体的には、以下の手順による。

1. データベースソフト・Accessに「書誌情報」と「キーワード情報」のデータベースを作成する。

2, 出版者や出版年・所蔵機関などの書誌情報は「書誌情報」データベースに入力する。

3, それぞれの勸化本の章段名を「キーワード情報」に入力する。

4, 各章段名のシートに、引用書目・固有名詞・重要語句や典拠情報を入力する。

上記を繰り返すことで、それぞれの勸化本の相互関係や、典拠関係・影響関係・出版背景などを把握した。

4. 研究成果

本研究では、羊歩・知空・空誓・玄貞・山雲子(坂内直頼)・妙音寺を取り上げた。

まず、研究の足がかりとして、延宝から元禄にかけて、多くの勸化本板行に關与した京都の書肆・川勝五郎右衛門の出版活動を仏書の出版から見直した。川勝五郎右衛門は従来、河勝五郎右衛門として、都の錦をはじめとする浮世草子の出版に關与した本屋として近世文学領域では周知されてきた。しかし、仏書出版の面から川勝を捉え直すと、その出版活動が実は、仏書において先に行われていることが明らかになった。川勝五郎右衛門が西沢太兵衛と行ったとされる『武道一覽』の一件は、それより先に、武田治右衛門との『念死念仏集』においてすでに行われていた手法であったし、都の錦以前に、必夢・玄貞・妙音寺といった、時代を代表する勸化本作家を見いだしていた。仏書に焦点を当てて近世文学領域を見直すことにより、新たな見地が得られる可能性が示唆された。

次いで、羊歩と、それに関連して『浄土勸化標目章』を取り上げた。浄土真宗本願寺派の学僧と言われていた羊歩の著述を読み直すことで、彼が浄土真宗に改宗する前は浄土宗僧侶であった可能性が高いことを示した。更に、羊歩の著述と書名に「勸化」を冠する最初期の勸化本である『浄土勸化標目章』とに多くの重複があることを踏まえ、『浄土勸化標目章』におさめられた源信母の諫言の和歌の出所が浄土真宗ではなく、浄土宗にあったと結論づけた。

浄土真宗本願寺派の学僧として、西本願寺2代目能化知空に焦点を当てた。知空の出版活動からは、知空の先進性が明らかになった。知空はまた、井原西鶴の浮世草子を出版したことで知られる毛利田庄太郎から複数の仏書を板行するだけでなく、『和漢三才図会』に跋文を寄せるなど、当代きっての文化人としての活動にも注目するべきであると提言した。

知空は延宝から元禄期の勸化本作家に影響を与えたが、同様に影響を与えたのが、空誓である。真宗仏光寺派の学僧とされる玄貞は、浅井了意の仮託仏書の実作者として知られるが、実は彼は空誓の仮託仏書も手がけていた。玄貞の仏書出版の流れは、そのまま延宝期に活動を開始した新興書肆等の隆盛と重複する。どこの誰かも明らかでなく、了意の仮託・模倣者として評価されてきた玄貞が、没年時には当代の名だたる学僧等と肩を並べて宗祖親鸞の著述の注釈書を板行するまでになった事実は、類板重板の禁をおかしながら成長し、ついには本屋仲間の一員として他の類板重板を退ける立場となった田中庄兵衛はじめとする新興書肆等の成功と関連付けられるものであった。仏書出版、そして勸化本作家の活動は、かくもまばゆいものであったのだ。

さてまた勸化本作家として書籍目録にのみその名を載せる妙音寺という人物がいる。妙音寺の著述はのちの勸化本の基準ともいえるべき体裁を採る。その内容から、妙音寺は浄土真宗本願寺派の学僧・了信であると研究代表者は結論づけた。知空や空誓の流れをくむ妙音寺の勸化本からは、延宝期頃にはじまった勸化本が、西本願寺の学僧らにより推進された可能性が示唆された。すなわち、この時期において、西本願寺では相伝断絶があった。本来ならば口伝で伝えられるべき唱導が梓にのったのには、理由があったのだ。結句、相伝がつづいた東本願寺からは、この時期同様の勸化本は出なかった。

最後に、俗人の勸化本作家として、山雲子(坂内直頼)を取り上げた。従来、山雲子の勸化本は彼の崇高な信仰心と結びつけられて言及されてきたが、実際にその内容を精査してみると、宗学を学んでいたら考えられないような話の配列・注釈を見いだせた。明らかに素人くさい山雲子の勸化本からは、彼が生活のために勸化本の執筆を行っていた可能性が示唆されるが、こうした俗人の勸化本執筆は、以後、戯作へと影響を与えることになる勸化本の展開を考える上で重要な示唆をも与えるものではないか。これについては、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 46
2. 論文標題 源信母・諫言の和歌にみる近世期におけるハナシの発現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教文學	6. 最初と最後の頁 144-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 115
2. 論文標題 勸化本に見る近世仏書の特質：「倩女離魂」を例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 196
2. 論文標題 勸化本作家玄貞と一七世紀末上方出版	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 98
2. 論文標題 翻刻 『拾穂書』 巻上 / 解題ならびに著者一考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 99
2. 論文標題 翻刻 『拾穂書』巻中 / 羊歩の著述	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村迪子	4. 巻 22
2. 論文標題 妙音寺とその周辺 初期真宗系勸化本の成立とその背景を調べて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雅俗	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木村迪子
2. 発表標題 勸化の素材としての漢籍受容 倩女離魂 を例として
3. 学会等名 2021年度日本近世文学会春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村迪子
2. 発表標題 近世文学と仏書 山雲子の著述に注目して
3. 学会等名 《シンポジウム》「仏教と出版の日本近世」(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------